〔研究ノート〕

キープ協会史点描（一）　清里一帯の開拓と入植者

松平信久

筆者は、二〇一八年三月に、エリザベス・アン・ヘンフィル[1]著　*A Road to KEEP, a story of Paul Rusch* (1969, 1970) を『キープへの道　昭和史を拓いたポール・ラッシュ』と題して翻訳・出版した（北條鎮雄と共訳　立教大学出版会刊　丸善雄松堂発売）。同書では、ポール・ラッシュの多方面にわたる活躍を追い、同氏の主要な働きであったキープ協会の誕生の経緯と、それ以降の発展の様子が詳しく描かれている。また、山梨日日新聞社刊による『清里の父　ポール・ラッシュ伝』でも、各種取材を通して、その歩みを丹念に辿っている。この二著によって、ラッシュ氏およびキープの歩みはその全容がほぼ明らかになったと言えようが、しかし、広範囲に及ぶ同協会の活動であってみればなお補足すべき点も残されているであろう。そこで本稿は右の二著を下敷きにしながらそれを補充し、また、別の観点を加えて、キープ協会の発展の推移とその背景を点描しようとするものである。本稿（一）では、清里の地域的発展の経緯や、清里に開拓者として入植した人々の状況やその人たちのキープとの繋がりについて考察を進めたい。

一　近世までの念場原の開拓

大日本帝國陸地測量部（国土地理院の前身）発行、一九一〇（明治四三）年測図「八ケ嶽」[2]によると、現在の清里一帯を含む念場原（ねんばがはら）は、ほとんどが針葉樹林と荒地であった（引用地図参照）。後にこの地に入植した奈良靖夫[3]の記述によれば「茅と熊笹と雑木の茫々たる原野」（奈良 1981　p.13）であった。この地図では、〔佐

「八ケ嶽」測図の一部

←至　板橋

久往還」が所々で弯曲しながら念場原を南北に貫通し、その原野の中央近くに〔清里村〕が位置し、周辺の東側に、長野県との国境のあたりから、〔三軒屋〕、〔平澤〕、〔樫山〕〔浅川〕などの集落が南に向かって点在している。往還には、信州南佐久の〔板橋〕から三軒家、平澤を通る脇道が通じているが、板橋以南の往還本道の左右には人家は全くなく、この道は「茫々たる」無人の原をひたすら南へ或いは北へと辿っている。また、原の北西側には、〔美森山〕が位置し、〔川俣〕を挟んだ南西部には〔井出原〕が南北に広がっている。

ところで、江戸時代の地誌である『甲斐国志』(4)には、この周辺の地形と気候について、つぎのような記述がある。〔本論での引用は、日原興忠によって刊

行された版によっている。引用文のルビと（　）内の記述は引用元の記述による。《　》内の記述は引用者の判断による漢字の読みと簡単な語意である。また、引用にあたり原著にはない句読点を補った。」

柏崎（カシハザキ）ノ牧（樫山村）　浅川村ノ北、瑞籬（ミズカキ）山[5]トテ高サ数十丈ノ断崖《だんがい》アリ。下ニ深沢川ノ急流ヲ帯フ。其絶頂ヘ近キ処ニ古時ノ佐久郡河上路アリ。舟窪ト云所ニ関門ノ迹《あと》存セリ。後、今ノ路ヲ開キ浅川ニ番所ヲ移ス。険路較々《かくかく》＝前に比べて》易シト云（日原 1977　p.706）。

平沢ハ信州ニ属スレドモ、却テ本州ノ界《さかい》ニ指シ入リ、前後無人境《きょう》ナル上、大山ノ麓ニテ霜雪《そうせつ》蚤《はや》ク下リ、寒烈ノ地ナレバ《中略》類ヒ稀ナル孤村ナリ（日原 1977　p.704）。

この記述から、当地が険阻な地形で周囲の村や集落から隔絶され、往時から厳寒の地として知られていたことが分かる。

また、念場原周辺の柏崎牧《かしわざきのまき》は、甲斐三牧の一つで、馬の産地であったことも記されている。

村ノ東北、船川上モ柏前（ママ）ノ牧ト云伝《いいつたわ》ル処アリ。野馬平、南牧ヨセ、北牧ヨセ、掛札ナド云《いう》地名存シタリ。其北ハ信州ノ川上ト一嶺ヲ隔ツ小念《こねん》トテ、念場原ニ相次キタル広平ノ原ナリ。歴史ニ載《の》スル本州年貢ノ御馬六十匹（真衣野、柏前、両牧三十匹、穂坂三十匹）両牧八月十日ヲ以テ期ト為シ牽進《けんしん＝牽引して進呈するという意味か》ス（日原 1977　p. 706）。

『ポール・ラッシュ伝』によれば、この馬は朝廷に献上されたもので、その歴史は九〇〇年ころ（平安時代の延喜年間）に遡れるという（山梨日々新聞社 1986　p.187）。

加えて念場原の開拓について、『甲斐国志』には、

念場ノ原　浅川、樫山ノ域内ニテ二村ノ耕地モアリ。《中略》相伝フ、此原ハ、中世ニ清次ト云者アリ。新田ヲ開キ、人戸ヲ建ツ。繁栄シテ念場千軒ト称セシ由。《中略》後ニ村居廃シテ処々ヘ戸ヲ移ス（日原 1977　pp.703-704）。

とも記されている。このように、一時はかなりの居住者がおり、新田の開発がされたことが窺える。それにも拘わらず、それが廃された要因は明記されていないが、土質（火山性強酸性土）、土砂や岩石、厳寒、水の欠乏などが関わっていると推測される。

さらに驚くことには、この地には遥かそれ以前から人

が住んでいた形跡がある。入植者の一人である谷口彰男[6]は以下のように書いている。

わが家の畠からは三か所ほど土器・石器の出る所があり、清里全体ではかなりあちこちに、それも水場の近くに、そういう所がある事、一番古いものでは縄文早期（8千年位前）、縄文前期（7千年位前）、縄文中期（4～5千年位前）、そして縄文後期（3千年位前）のもの、更に僅かではあるが古墳時代前期（2千年位前）のものがある事がわかりました。そして、ごく最近の成果で、わが家の西の「丘の公園」開発予定地の試掘調査では、今から1万5千年位前の旧石器も数点発見されています（谷口彰男／高根清里小学校〈以下、「高清小」と略記〉1985　p.77）。

このことについて、奈良は

そのむかし八っ岳の中腹に展開した縄文文化は期間数千年に亘って栄えたという。そんな遙かな悠久をこの八っ岳で生きながら、ある日を境に衰退し、やがて忽然として消え去った。気候の変化が原因であったともいわれている（奈良 1981　p.252）。

と記し、この地に気候変動があった可能性を示唆している。

二　清里村の誕生

一八七五（明治八）年二月一五日、この地域を含む浅川、樫山の二村が合併して〔清里村〕が生まれた[7]。なお『甲斐国志』の樫山村に関する記述に「幽遠ニシテ念場ト云曠原モ本村ノ域ニ懸レリ」（日原 1977　p.224）とあることから、清里村誕生以前、念場原一帯は樫山村に属していたことが分かる[8]。

この村名命名の由来については、前出の谷口は

誰がどの様な理由で清里村としたかは、僅か百年ほど前の事ですが今のところ全く不明です。もう一つの清里、新潟県中領域郡[9]清里村（上越市付近）と、北海道斜里郡清里村（斜里町付近）をも参考として是非解明したい問題です。しかし、先人は良い名前をつけてくれたものだと感謝せざるを得ません（谷口／高清小 1985　pp.79-80）。

と述べている。この村名命名の由来については、筆者も明らかにすることができなかった。しかし、清冽な印象を抱かせ、その後のこの地の消長に深く関わる〔清里〕の名が、まだ原野であったこの地につけられたことは、特筆に値することであったと言えよう。

また、冒頭に触れたように、明治時代の地図にすでに〔美森山〕の名が出てくる。

この名について『甲斐国志』には、

宇豆久志森　八カ嶽ノ麓、念場原ニ在ル小山ナリ。今ハ木ナシ（小者ヲ宇豆久志ト云ハ方言ナリ。美麗ノ義ニアラズ）（日原 1977　p.412）

との記述があり、このことから、旧来からの「宇豆久志森」の名に拠りながら〔美森〕に転化したことが推測される。〔美しの森〕は、〔清里〕とともにこの地を象徴する名称であり、つつじの名所でもあることからこの転換は当を得たものであったといえよう。

なお、〔清里村〕は一九五六（昭和三一）年に近隣地域に合流して〔高根町〕となり、さらに二〇〇四（平成一六）年、北巨摩郡に所属する町村のうち、小淵沢町を除き、長坂町・高根町・大泉村・白州町・武川村・須玉町・明野村の七町村が合併して〔北杜市〕となった。さらに、二〇〇六年には小淵沢町も北杜市に加わり、北巨摩郡は消滅した。

三　昭和前期の開発・展開

山梨県は、昭和初期の農村不況への対策の一つとして、一九三三（昭和八）年に、「八ヶ岳開墾事業」を策定し、この地域の開発を企図した。しかし、その計画は一向に進展しなかった。先にも延べた、周囲から隔絶した地形、土砂や岩石、土質、寒冷特に冬季の厳寒、雨季の汚泥、砂礫のため湧水が少なく河川も遠いことによる水の欠乏などが障壁となっていたと推測することができる。

1．小海線の開通

その状況を打開した大きな要因の一つは、一九三三（昭和八）年に小海線が開通し、清里駅が開業したことである。小海線の前身である佐久鉄道は、一九一五（大正四）年に、長野県の小諸～中込間で開業した。同線の開設と延長の経緯については、中村勝実『佐久鉄道と小海線』に詳しいが、この鉄道敷設の背景について、佐久地方にはつぎのような状況があった。

当時の佐久地方は、東西に信越線が走る北佐久に比較して、南佐久は全くの〝未開の地〟であった。木曽や伊那にもすでに鉄道が通じていた。県内で、ひとり取り残された〝陸の孤島〟であり、「信州の北海道」ともいわれたのが、南佐久の実情であった。ことに小海村以南の八ヶ岳山麓一帯は、全国でもきっての山林資源に富んだところ。この開発のためにも一日も早い鉄道敷設が必要とされていた（中村 1985　p.27）。

この鉄道敷設には、地域の資産家や銀行家が力を注い

だと言われるが、その狙いの中には沿線各地の商業的・経済的発展も含まれていた。その狙い通り、鉄道の開通とともに、例えば、中込駅周辺（現・佐久市）には旅館や商店が新設され、鉄道のもつ地域活性化の効果が如実に現れた（中村 1985 pp.50-52）。こうして同鉄道は、一九一九（大正八）年までに順調に小海まで延長された。

しかしその後の経済不況の影響や、小海以南の土地の高低差、多くの橋梁やトンネルを必要とする地形的条件から、路線延長は頓挫した。そのような中、一九三四（昭和九）年に、同線は政府に買収され、国鉄の〔小海北線〕となった。国鉄は、一方で、その前年の一九三三（昭和八）年に〔小海南線〕として、小淵沢～清里間を開通させており、甲斐小泉、甲斐大泉、清里の三駅が一斉開業した。東京からは僻遠の地であった清里への行き来は、一挙にその時間を縮めることになった。続いて一九三五（昭和一〇）年一一月二九日、最後の未通区間であった清里～信濃川上間も完成して、小諸～小淵沢間が全線開通し、小海線は信越線と中央線を結ぶ中部横断鉄道としての重責を担うこととなった。

また、清里駅（一、二七五m）と野辺山駅（一、三四六m）の両駅は、海抜一、三七五mという国鉄の最高地点をはさんで、無人の原野に開かれた駅だったが、日本一標高の高い所を走る高原列車として全国的に有名になった。

なお同線は、最終的には静岡県と新潟を結び、太平洋と日本海をつなぐ本州横断鉄道となる構想もあったが、それは実現には至らなかった（中村 1985 pp.89-94）。

2. 駅開設の頃の清里

駅開設の頃、清里は人家もまばらな僻村であった。

その頃は、樫山から清里駅の間には、私の家が一軒あるだけだった。道は、樫山から駅まで、山の中を曲り曲った泥道が一本あるだけ。この頃の駅前には、4～5軒家があるだけ、今の下念場に4軒程、大門川西で念場ケ原に10軒位しかなかった（小清水高重／高清小 1985 pp.80-81）。

そのような地域にとって、鉄道の開設は有史以来の大きな出来事であったろう。一九三三年七月二七日、小淵沢発清里行きの第一号列車を迎えた清里住民の様子を、当時一五歳であった少女はつぎのように書いている。

心に残る事、いよいよ清里にも汽車が通るという事です。今までは、汽車に乗るためには、長坂まで歩いて行ったのですから、清里の人たちにとっては、どんなにか嬉しかった事であったかしれません。部落中皆で、樫山から清里駅までの道を、一年

がかりで作りました。多分、私は、15歳か16歳頃だったと思います。開通の日には、清里村こぞってのお祝いでした。提灯行列、旗行列、お祝いのお酒もで、婦人の人たちのおどりと大変なものでした。初めて汽車を見る人も数多く、村民こぞって感激した一日だったと思います。私は、汽車に乗ってみたい一心で、冬の間、親にお願いして奉公に出ました（浅川きくじ／高清小 1985　p.83）。

鉄道開設と共に、この地は先ず、木材の集積、搬送の拠点として、長い雌伏の時から目覚めることとなった。

駅の開業と同時に八ケ岳の恩賜林からモミ、ツガ、シラベなど豊富な木材の搬出が始まり、清里駅の北側には大きな貯木場が開かれた。春から秋にかけて切り出した木材はトロッコで貯木場に積まれ、秋に競売された。このシーズンになると、毎日十両程度の貨物発送があり、業者が貨車を奪い合うほどの活況を呈した（山梨日々新聞社 1986　p.188）。

駅開設当時の村の様子をさらに詳しく伝える中村の文章を資料【1】として文末に採録した。

3．清里開拓のリーダーたちの来清

小海線が全通した翌年の一九三六（昭和一一）年は、その後の清里の展開を支えた三人の重要な人物が入清した注目すべき年となった。

〈春〉その一人、清里酪農のパイオニアとして先導的な役割を担った茅野（かやの）達一郎が、この年の春、当地に入り、当初は長野県南牧村の板橋川河畔で花卉栽培に取り組んだ（奈良 1992　p.55）。

〈八月〉その二は、安池興男（おきお）の山梨県営八ケ岳山麓開墾事務所長としての赴任である。安池は、やがて入植してきた開拓農民を衷心から支え指導した。当地の開拓営農の確立は、この人物の援けがなければ危うかったと言うべきであろう（奈良 1992　p.56 および岩崎 1988　巻末年表）。

〈秋〉そしてその三は、ポール・フレデリック・ラッシュ（Paul Frederick Rusch）である。ラッシュは、立教大学生を中心とした「日本聖徒アンデレ同胞会」（BSA）の活動のために、青少年の育成と指導者訓錬を目的としたキャンプ場に相応しい場所を探していた。この年の秋に清里を訪れ、富士山が見え、八ヶ岳が迫る眺望に魅せられた彼は、早速この地を候補地に決めたのである。そしてここが山梨県有地であると知るや、直ちに県との借地交渉に入り、借地に成功し「清泉寮」の建設を目指すことになった（山梨日日新聞社 1986　pp.175-180および奈良 1992　p.57）。

4．ポール・ラッシュと清泉寮

二・二六事件、中国戦線の拡大など、世情の不安定、戦時色の濃度が日増しに募る中、一九三八（昭和一三）年は、清里にとってエポック・メイキングの年となった。

その一つは、ポール・ラッシュによる清泉寮が竣工（七月二四日落成式）し、早速利用が始まったことである。立教大学の学生を中心に、岩を取り除き泥濘と格闘したこの建設工事の大変さは『キープへの道』にも詳しく描かれている（ヘンフィル 2018　pp.48-51）。

村の人たちはこの施設を「りっきょう」と呼び、最初は半信半疑で、そしてやがて胸襟を開いて様々な繋がりを持つようになった。

清泉寮。その名は清里村と大泉村にまたがっているところからつけられた。八ケ岳高原にふさわしい良い名前であるが、はじめはなんといっても耳新しく聞きなれなかった。立教大学のキリスト教団体が建てたというので、地元ではもっぱら「りっきょう」と呼んだ。その方がわかり易かった。清泉寮は日本聖徒アンデレ同胞会が青少年のキャンプ場として作ったものであり、立教大学の学生（立教大学聖徒アンデレ同胞会）がその建設に多数参加した。清里では珍しい角帽の労力奉仕団で賑わい、中心人物のポール・ラッシュも立教大学の先生であると伝えられた。だから清泉寮は、まだなにが出来るのかわからなかった材木運びの段階から「りっきょう」であり、建物が完成して聖公会の旗がひるがえっても「りっきょう」だった（奈良 1992　p.70）。

この施設は、第二次大戦中は活動中止を余儀なくされたが、敗戦後は、キリスト教信仰にもとづいた民主主義社会の建設を目指す、清里農村センター計画の拠点となった。

この働きは「清里教育実験計画」（Kiyosato Educational Experiment Project= KEEP =キープ、一九五一年設立）へと繋がってゆく。この計画では、高冷地農業の改革を目指し、清泉寮に続いて、清里聖アンデレ教会（一九四八年）、聖ルカ診療所（一九五〇年）、地域図書館（一九五一年）、高冷地実験農場（一九五一年）、聖ヨハネ保育園（一九五七年）、清里農業学校（一九六三年）等々を創立、八ケ岳山麓の寒村を大きく変貌させた。

5．小河内ダム建設に伴う家屋水没と清里への入植

右と同じ一九三八年の、清里にとっての大きな出来事は、二八戸六三名のまとまった数の入植者があったことである。この入植は、東京市の上水用水源として奥多摩に小河内ダム（現・奥多摩湖）の建設が計画され、そのために水域の多くの家屋が水没することになり、そこの

住民が立ち退きを余儀なくされたためである[10]。

二八戸の出身村を見ると、小河内ダムの上流にあたる山梨県北都留郡丹波山村（鴨沢地区）が二六戸、小菅村金風呂から一戸、東京市の小河内村が一戸である。彼らは念場原の県有地（通称相ノ原）の一二八町歩に入植した（奈良 1992　p.57および岩崎 1988　pp.36-55）。この地は、「八ヶ岳開拓部落」[11]と名づけられたが、上記二八戸の他に個別に入植した四戸[12]、および丹波山村からの移住者のうち一人が独立したことによる計三三戸によって形成され、清里の農業開発の先鞭をつけることになった。

この年の四月一七日、丹波山村などからの移住者の各戸一人ずつの先発隊を甲府駅に出迎え、続いて中央線に同乗して小淵沢から清里に向かったときの様子を安池興男は次のように書いている。［ルビは引用者による］

車中一同の談話の中にも運命の推移に不安焦燥の面持窺われ、一見何れも野人の容貌、風体なれども、その動静は思想順良にして意志堅固なる様相察知せられ、之等純情無垢なる犠牲者の運命開拓への悲痛な心境に同情を覚え、愈々以て指導者の責任重大なるを悟る。

十時五十分開拓地の玄関口、清里駅に下車、時恰も高原の快晴は入植者の気持を引き立て、開拓地への第一歩を力強く踏ましめ建設への希望を明るく懐かしめたり（安池 1978　p.9）。

一方入植者も希望と不安の入り混じった面持ちで清里の地を踏んでいる。入植者の一員で当時二七歳だった酒井久重[13]は次のように書き残している。

不安と期待で清里駅に着いた時、一番最初に感じたことは、はてしなく広がる大地と大空に、鴨沢の狭い山あいになれていた私には、身震いするような感動でした。しかし、それが大変です。やることなすこと全部が勝手の違うことの連続です。同じ農業とはいえ、鴨沢の農業は、狭い畑にわずかな種子を播くだけでしたが、この広い大地に立った時、自分が蟻のように小さくなったのではないかと思われるほどの広さでした（酒井久重／高清小 1985　p.40）。

この回想にもあるように、広大な土地に夢を託して始まった開拓生活であったが、その毎日は苦心と苦闘の連続であった。その体験記を資料【3】（1）（2）として末尾に掲載する。

6．初期入植者たちと安池興男

小河内からの入植者は、農民とは言え、以前の仕事は狭い土地での耕作の他、炭焼きと養蚕であり、耕作に関しては知識も経験も乏しかった。この開拓者の指導に努

力を傾注したのが安池興男である。安岡は、時として移住者達と寝食を共にして、土質改良、施肥、播種などを初歩から手ほどきした。彼らが試みた農作物は、ヒエ、アワ、コンニャク、ジャガイモ、ソバ、大豆、小豆、大根、トウモロコシなどであった。

奈良によれば、安池は清水市生まれ、静岡中学、六高、京都帝大農学部を卒業し、一九三六年、三二歳で山梨県経済部耕地課技師となり、同年夏に山梨県営八ケ岳山麓開墾事務所長として赴任した。以後、奈良県耕地課長として転任するまでの約五年間、八ケ岳山麓の開墾にたずさわり、八ケ岳部落の創生に心血を注いだ（奈良 1992　p.56）。

安岡の入植後の開拓民を思う心情の深さは以下の文章からもくみ取れる。［ルビは引用者による］

> 入植者を迎へてより日夜厚生施策の推進に心胆を砕き、甲府に在りても常住坐臥片時も現地の動静に心離れず、入植二年目の昭和一四年の秋も漸く深まりて、居宅の縁下におろぎの巣だく音に夜陰不図覚醒ては高原冷涼の現地の寒気に思ひを走せ、まんじりともせずに夜を明したること幾度か（安池 1978　p.15）。

耕作以外のことでも、住宅、医療など多くの課題解決のために奔走した安池であったが、中でも困難を極めたのは、小学校分教場の設立であった。子どもたちの通学に関しては、

> 入植当時農家の最も心を労せしは、小学校低学年児童を入植地より二里余りの道程を降雨風雪を侵して峠を越へ渓谷を渡りて清里小学校に通学せしむることにして往復に附添う父兄の時間空費（安池 1978　p.15）

もあり、また本校（樫山）でのいじめの問題もあった。これらの事情から、分校設立は地域にとっての悲願であった。しかし、折からの日中戦争の激化に伴う国家予算の削減、物価高騰、建設業者の人手不足、それに伴う地域住民の自己負担の増加などから工事はいく度も中断し、頓挫寸前の危機に立たされた。関係官僚の横暴な言動にも悩まされた。資金不足に追い込まれた安岡は、静岡に住む実父に頼み込みなんとか融資を受け窮地を脱するということもあった。

このような曲折を経ながら、一九四〇年七月二五日にようやく校舎竣工にこぎつけることができたのであった。文末に資料【4】として掲載した、落成式当日の安池の感慨は彼の思いを余すところなく描き出している。

この事業は、移住後間もない入植者のうちから五組の離脱者を出すことにもなった。原因は小学校建設に伴う意見の相違にあった。分教場建設のためには自己負担は

止むを得ないとする推進意見に対して、反対者側は自己負担を出してまで分校を造ることはない、遠距離通学も致し方なしとして対立し、結局反対者側の五組は入植地を出て行き、二八戸は二三戸に減ってしまったのである。

安池と八ケ岳部落開拓民との交流は清里を去ってからも長く続き、退官後も、物心両面での援けを続け開拓者達の支えとなり、関係者から「八ケ岳区開拓の父」と呼ばれ敬愛された（岩崎 1988　p.49）。

キープと開拓村との二つの活動の指導者、ポール・ラッシュと安池興男が共に「清里の父」と呼ばれていることも興味深い。この二つの活動は、そもそもの背景や動機は全く異なっていたが、その後のこの地域の発展のために不可欠な連携関係がもつことになった。また開拓村のメンバーのうちの多くは、キープ協会やその教会（清里聖アンデレ教会）との繋がりをもち、中心メンバーとなった。

7．清里酪農のパイオニア・茅野達一郎

茅野は慶応義塾大学出身で、わが国で最も歴史の古い牧場の一つである神津牧場[14]に学び、八ケ岳山麓での畜産を目指して、一九三六年この地に入植した（奈良 1992　p.55）。彼の生家は資産家であったが、その財力に頼ることをしなかったために、当初は、長野県川上村の板橋川畔に入植して花卉栽培から始めた。そこでの五年ほどの悪戦苦闘の末、先に述べた分教場建設をめぐる対立から離村者が出て、八ケ岳部落に空きがあったので、そこへ入植した。そしてその地区の農事組合長を勤めながら乳牛の導入、普及を図った。

茅野は八ケ岳部落の人達に乳牛の有用性を説き、火山灰高冷地のここでは穀物は育ちにくく、堆肥を使った有畜農業でゆくべきであると主張した。（中略）実際、ジャガイモは収穫してみると、播いた時の種薯よりも小さい薯ばかりだったし、トウモロコシは子供の背丈くらいにしか育たなかった。ここでの農業にはどうしても家畜の糞尿が必要だった。まして化学肥料の乏しい時代である。何を作ってもうまくいかないままに牛を飼ってみようという人も現れてきた。茅野は甲府勧業銀行に通って乳牛導入資金の貸付けを折衝し、苦心の末、乳牛の導入を実現した。白黒のホルスタイン乳牛である。やがて茅野牧場を集乳所として仲間達[15]の牛乳が集められ、小海線の一番列車に乗って〈清里牛乳〉が甲府市穴切町の新海牛乳へ向けて送られていった（奈良 1992　p. 80）。

これは、清里における酪農の実質的第一歩であったが、戦時中という悪条件に重ねて、先駆者として道を開くこ

との困難さに直面し、厳しい展開を迫られた。

昭和一七～一八年頃というから、あのいまわしい戦争の真最中である。導入牛は飼料不足と飼養技術未熟のため、つぎつぎと斃れていった。自然条件、社会条件ともにあまりにも厳しすぎたのである。（中略）清里酪農五〇年の歴史は挫折と転業の歴史だったが、この黎明期の牛飼いほど、個の力の弱く、時代の波に翻弄されたことはなかった（奈良 1992 pp.80-81）。

茅野は、戦後、キープに所属しその農場長を務めたが、その働きについては、稿を改めて論ずることとしたい。

四　戦中・戦後の入植

一九四一年には、県立青年道場「機山寮」が念場原（後の朝日ケ丘部落）に建てられ、一二～一三町歩の原野が拓かれた（岩崎 1988 巻末年表）。

太平洋戦争の末期を迎えた一九四五（昭和二〇）年以降、各地の被災者、満蒙開拓義勇団からの帰国者、外地からの引揚者などの清里への入植があった。敗戦が目前に迫った一九四五（昭和二〇）年夏ころから、山梨県は、「八ケ岳集団帰農者募集」を行なった（奈良 1992 p.83）。その募集に応えて東京、横浜など各地の被災者など約一〇〇名が、六月、八月、九月にかけてヒッポオ沢と呼ばれる地区に入植した。この一団は中念場帰農隊と合体するなどの曲折を経て、一九五一年に朝日ケ丘部落（清里駅の南約一km、八ケ岳集落の西側に位置する）を形成した。かなりの数の離脱者や、その後を継承して入植した人による増減を含めて戸数は二〇戸である。この集落の特徴は、下記のように出身地が多様な事である。すなわち、東京3（うち小河内村1）、横浜2、長野2、群馬2、岡山1、静岡1、県内9（北巨摩郡3、中巨摩郡2、樫山2、山梨市1、津金1）。

一九四五年一〇月には下念場（清里駅の約四キロほど南、国道一四一号線の西側に位置する）に二〇戸が入植し、下念場帰農組合を結成した。他の二つの組合員を合わせてこの地区の戸数は二四に及んでいる。その出身地は、樫山9、浅川3、津金1、江草1、五町田1、清里1、など地元地区が大半を占め、他は、県内の南巨摩郡1の他、長野4、東京・横浜・熊本各1となっている。

東念場集落は、清里の「南玄関」にあたり、下念場と国道を挟んで反対側の西に位置する。この地区への主たる集団入植一九戸は一九四七年九月であるが、他の個別入植者六戸、合計二五戸の構成は地元出身者が多い。すなわち、樫山10、浅川10、甲府2、東京3である。

こうして清里の開拓集落は、八ケ岳、朝日ケ丘、下念

場、東念場の四集落となり、その後の発展をになうことになった[16]。

清里の当時の住民構成は、このように、平澤、樫山、浅川などの集落を除けば、大部分が入植者によって成り立っている。その出身地は近隣、近在の村や町が多いとは言うものの、関西、東京、横浜など広範囲に及んでいる。当地は、ヘンフィル氏が『キープへの道』で述べている、先祖代々の土地を引き継ぎ営々として稲作に取り組んできた、日本の典型的な農村とは、その様相を全く異にしている。奈良はその著『清里昭和史散歩』でこのような外来の開拓者を「きたれもの」と呼んでいるが、このことばを借りれば、清里の人々は、入植時期に数年から数十年の差があるとは言え、ほとんど皆「きたれもの」に他ならない。

清里への入植者は、日中戦争から太平洋戦争へと戦争が拡大する中で離別者を出した。更に戦後の混乱と、その後の高度経済成長の中でも農業からの転職者を出し続けた。このような清里農業の先細りの道は、日本農業の縮図でもあったといえよう。また清里への移住と、そこでの営農がいかに困難なものであったかの実証でもあったと思われる。

ポール・ラッシュは、上記の外来開拓者の中で特に異色の存在ではあるが、「きたれもの」と同じ部類に入る仲間同士ということになろう。しかし清里農業の厳しい条件下で、ひたすら当初からの理想の実現を目指して活動をし続けたことの意義は絶大であった。

資料

【1】開設前後の清里駅前の様子（中村勝実著『佐久鉄道と小海線』より）

清里駅がオープンした当時は、裾野十里といわれる八ケ岳高原のこの一帯は、大森林地帯。その中にポツンと駅が設けられた。駅ができるというので、まず運送店ができ、簡易旅館も誕生、そして豆腐屋が開店した。こうして開業の朝を迎えたのだが、駅を含めてもたった四軒というのが、五二年前の清里駅の姿であった。

一日の乗客は十人程度。そのころ清里～小淵沢間の運賃が二十九銭だったので、その売り上げはどうみても一日三円ほど。もちろん駅長はいなかった。小淵沢の管理駅として、駅長は小淵沢が兼ねていた。乗客がこの程度だから、列車は客車一両に貨車何両かの混合列車。これがC一二に引っぱられてあえぎあえぎ登る姿は、何とも牧歌的風景でもあった。

当時の運転回数は午前二本、午後二本の一日四往復。冬など夕方の列車で小淵沢を乗ると、清里ではとっぷり

暮れて一寸先もわからぬ闇の中。駅前道路は、牛馬車が通るにもこと欠く狭い道。その両側は念場ケ原というその名が示すように、ススキと原生林におおわれ、男でも一人歩きは淋しいところだった。現に開通当時、この念場ケ原で通行人が強盗に襲われ、刃物で刺されたという事件があった。さらにそれより五年、十年さかのぼると、女旅芸人が暴行されたとか、毒消売りが殺された、といったうわさは絶えなかった。

それが駅開設とともに、豊富な木材の搬出となった。馬車馬（当時は運送ひきといっていた）で続々と駅に木材が運ばれ、駅前はたちまち木材の山となった。木曽の上松に匹敵するような貯木場ができた。

貨車は連日、十両程度が発送された。威勢のいい中仕の積み込み唄に合わせて積み出される貨車は、木材業者の奪い合いだった。川上や小海の木材店も清里へ進出、この積み出しとなったが、貨車を確保するため専任の社員が泊まり込みで当たった。一年後の清里は大貨物駅に一変した。小渕沢の管理駅だったこの駅にも、やがて〝人間より木材のため〟に駅長が配置された（中村 1985 p.156）。

【2】移転問題で緊迫する旧・小河内村（石川達三『日陰の村』より）

校門から自転車のベルが喧しく鳴りながら人々をかき分けて入って来た。ゲエトルをまいた若い青年が二人、玄関に近づいて来て人の顔も分らない暗がりに立ち、自転車の前灯をふりまわしながら叫んだ。

「対策委員の方、おいでになりませんか」

「誰だ?」と昌国がふり向いて言った。

「小管と丹波山の者です」

昌国は黙って二人に近づいた。代作も村長も彼にならってぐるりとこの二人をとりまいた。そして騒ぎ立った村民の五、六十人がその外を垣根のように囲んだ。二人は村からの使いを持って来た男であった。その報告は聞く者の心に白刃を突き通されたような戦標をあたえた。

――丹波山、小菅両村は今朝から協議した結果東京市、府、内務省の誠意を信ずる事が出来ないという結論に達した。よって明日早朝大挙して東京に出て各庁を訪問陳情することに決した。小河内村はどうするか、一緒に行動する気はないか。

使いの用件はそういうものであった。二人の青年は息をはずませながらこれだけを言い終って返答を求めた。

【3】小河内からの入植者たちの労苦

（1）根津吉夫（入植当時一三歳）

新天地の開拓生活は、予想よりはるかにきびしい日々であった。割り当てられた原野（一戸当たり四八アール）を切り開き、岩を取り除いて田畑を作る作業から始まった。大きな木の根を抜くのに大変苦労した思い出がある。

八ケ岳の火山灰土（酸性土壌）と、高冷地という悪条件のため、作物は思うように作れなかった。肥料という物もあまり手に入らず、土地を肥やすことができずに、あわ、むぎ、じゃがいも、とうもろこしなどを少しずつ作って行くのがやっとであった。丸太小屋とランプ生活の中で、八ケ岳おろしの厳しい寒さに耐えて行くには、並大抵ではなかった。厳冬には酒・しょうゆが凍ったほどである。また、ここは水のない地区で、雨水を溜めて使ったり、時には、雪を溶かして使ったこともある。

水の苦労が主婦にとっての一番の悩みであった。

道路も石ころだらけの狭い山道で、病人が出た時などは、その道を登って清里駅から小淵沢まで行かなければ医者が居なかった。そんな状態であったから病気で亡くなった者もかなりあった。

牛を使って材木を引く作業や炭を焼いて生活をつないで行くには、苦闘と忍耐の連続であった（根津吉夫／高清小 1985　pp.44-45）。

（2）小須田正市（入植当時一五歳）

わたしも満州に行くつもりだったんですよ。ところが親父が病弱で、遠い満州へ行くことを許してくれなかった。次にはスマトラに行く話があって正式採用が決まったのだが、そこも親父がゆるしてくれない。そうこうしている内に、清里の開拓団に空きがあると教えてくれる人がいた。ちょうど五人組と呼ばれた人たちが脱落して出て行った後だったんですね。

この日から、厳しい毎日の生活が始まった。全くの無知の清里の地に来て、全てが初めての経験ばかり。農具一本ない。火山灰土で地力が無く、不毛の土地と言われていた八ケ岳清里高原には、生き生きとしていたのは、大自然の環境だけであった。

従って、気候は寒く、地力はない。住まいは悪く、衣類も無い。井戸水も出ない。食糧は無く電気も引けない。石油ランプの生活で、今見る清里のように、自然や生活を楽しむようなことは勿論なかった。

毎日同じ作業の繰り返し。生活にかかる資金稼ぎに、冬は大雪の下で身を切られる様な風と寒さを突いて働いた。当時の資金稼ぎといえば山での仕事であった。

山仕事と開墾の仕事で毎日精一杯働いた。汗と土にまみれ、水不足のため風呂にも入れず、冬はアカ切れとヒビ割れの手足で、一日の作業が終わり夜になると疲労と空腹で腕も上がらず全身が震えてくる。人影もなく、声

もなく、松と唐松の林の中から聞えてくる小海線の列車の汽笛の音を頼りに時間の見当をつけて家に帰る。また、交通や通信の便も悪く、家族や区民の生活のために、風雨を凌ぐ家の補修、道路補修などの共同作業と奉仕が続いた。青春時代の楽しさ等、さらさらなく、ただ今日が終わって明日の生活をどうするかの心配の繰り返しの毎日が十年ぐらい続いた（小須田正市／高清小 1985 p.46）。

【4】分校開設にあたっての感懐（安池興男）［ルビは引用者による］

斯くして待望久しく教育施設の実現による明るき雰囲気は八ケ嶽高原の開発に大いなる力を発揮するに至る。迂途曲折、殼頭（かくとう）揉身幾度（じゅうしんいくたび）変転に耐へ忍び一途に入植者の厚生を念願しての精神の甲斐ありて、高原開拓建設の表象たるべき八ケ嶽分教場の開校を記念する式挙行の日昭和十五年七月二十五日は遂に来る。入植者父兄一同は素より木の香も新らしき分教場に学び得らるゝ幼き児童を初めとし近郊近在々住の子弟を有つ父兄の顔、々、々、夢想だにせざりし文化教育施設の誕生を迎へて何れも喜びに溢れ、感謝に満つ。

十時式典開会を宣し東京市小河内貯水池建設事業との因念（いんねん）浅からぬ関係を通じて今日の式典の佳日を迎へたる大いなる喜びと感謝の辞に次いで安池開墾事務所長壇上に起つや居並らぶ入植者父兄一同は素より幼ながらに分教場今日在るの父兄の労苦を思ひ忍びて児童一同も共に感極わまりて鳴咽（めいいん）低頭する感激を前にして辿りし苦楽の数々は一瞬走馬灯の如く去来して万感胸に迫りて言葉も出でず傍濾（ぼうろ）只々（ただただ）涙只々袖を濡らすのみ。

次々に起つ参列者の祝詞と賛辞に満ちて思出深かき式典は目出度く終了の後父兄の労苦き（ママ）稿（ねぎ）らわんと一月余りに亘りて毎夜懸命に練習を積みて企画せる入植者青少年の演ずる児童劇は機会に恵まれざる山間僻地の人々を心から慰め得て観劇者の喝采を博し行事に光彩を加へたり（安池 1978 pp.24-25）。

注

(1) 【ヘンフィル氏の晩年の消息について】

『キープへの道』の執筆時点では、筆者は、同氏の逝去年を含む晩年の消息を知ることができなかった。その後、キープ協会・ポール・ラッシュ記念館の学芸員・秦英水子さんの丹念な調査や、元キープ職員の廣嶋都留さんへの聞き取りなどによって、不明な点がかなり明らかになった。以下、その諸点を書きとめておきたい。

（1）サンフランシスコ州立大学（San Francisco State University）にヘンフィル夫妻の名を冠した奨学金制度が設けられている。この制度は夫妻の子息であるロバート・ジュニア・ヘンフィル（Robert Jr. Hemphill）とディヴィッド・ヘンフィル（David Hemphill）による、

両親を記念する寄金に基づき、同大学の教育学大学院で、文化、言語、教育、社会の問題に取り組む学生への奨学を目的としている。ヘンフィル夫妻が取り組んだ課題と同じ分野への研究の深化・発展が期待されている。

(2) 以下の①～③は、右記奨学金の紹介記事および廣嶋さんへの聞き取りによっている。

①夫・ロバート（Robert F. Hemphill）氏は、米国空軍のパイロットであったが、第二次大戦後日本を含む数ヵ国で勤務し、一九六四年から六七年までは東京のアメリカ大使館で駐在武官を務めた。日本での勤務を終えて退役後、二〇年間ハワイに住み、ハワイ州議会の立法スタッフとして働いた。その後、ワシントン州オリンピアに移り、そこでの二〇年ほどの生活を経て、二〇一〇年にカリフォルニア州ソラーノ（Solano）で亡くなった。彼は、いくつかの教会の積極的なメンバーであり、ストーリーテラー、詩人としてユーモラスな児童図書の出版に携わり、*Hand Me Downs*（1996）と題する詩集を編纂した。

②エリザベス・アン・ヘンフィル氏は、ハワイに移ってからは、女性の問題への取り組みを深めた。その成果は、一九七九年に出版された詩集 *Third Testament Women*（『第三の女性たち』）に現れている。彼女はまたアメリカ大学女性協会（AAUW）の活動にもリーダーとして加わり、一九七八年から一九八二年までハワイ州支部の会長を務めた。さらにホノルル市と郡の図書館諮問委員会のメンバーとしても活躍し、コミュニティリーダーシップへの貢献からハワイのYWCAによって表彰を受けた。

ホノルル・アドヴァタイザー（*The Honolulu Advertiser*）の記事によれば、彼女は一九八五年八月五日、ホノルル近郊のカイルアで肺がんのために亡くなった。享年六五歳であった。

③夫妻には、ロバート、ヴァージニア・アン・アダムス、デイヴィッドという二男一女の子どもがいる。

(2) 【測図】この地図は、一九一〇（明治四三）年測量、一九一三（大正二）年六月発行によるもので、この地の測量図として最も旧いものである。その後この地図は、一九三二（昭和七）年、一九四六（昭和二一）年、一九五四（昭和二九）年に三度にわたり改訂されているが、敷設された鉄道線路の追加などを除けば大きな変化はみられない。さらに一九六三（昭和三八）年測量・一九七三（昭和四八）年国土地理院発行の「八ケ岳」に至って、行政区や各地区の名称も全面的に書き換えられ、また街道沿いの建築物も記入されている。最新のものは、一九九二（平成四年）三月、国土地理院発行（四色刷）のもので、「明治四三年測量　昭和五二年編集　平成三年修正」となっている。

(3) 【奈良靖夫】山梨県の出身　早稲田大学を卒業後、清里（朝日が丘部落）に入植。キープで学んだ後、本格的な酪農経営に取り組む。幾多の障害を乗り越え、県の畜産共進会で優勝するなど成果をあげた。文筆に優れ、『清里　燃えつきた原野』、『清里昭和史散歩』『コマ』などの著作を残した。

(4) 【『甲斐国志』】全編一二三巻の甲斐地方の総合的な地誌である。編者は甲府勤番の松平定能（伊予守）で、一八一四（文化一一）年に成立した。本稿での引用は、責任者・日原興忠によって刊行された版（天下堂書店発行、一九六七年四月三〇日発行）によっている。

(5) 【瑞籬山（瑞牆山）】現・北杜市の北部にある標高二、二三〇mの山で、奥秩父の山域の主脈の一つ。現在は日本百名山の一つに加えられている。

(6) 【谷口彰男】帯広畜産大学を出て一九五六年に入植。大学で畜産を学び本格的な酪農を目指しての入植であったが、それだけに周囲から

の注目や抵抗も浴び経営に苦心を重ねた。一九六四年からは「牧場民宿」を始め、兼業となった。

(7) 【合併の時期】『清里開拓物語』（岩崎 1988）の巻末年表による。

(8) 【浅川、樫山、両村の村勢】この点について、『甲斐国志』はつぎのように記している。［句読点、平仮名によるルビは引用者による］

浅川村

一、高百拾八石三斗九升五合、戸五拾七、口百九拾壱、男九拾弐、女九拾九、馬拾四、

津金ノ北、長沢ノ東ニ当レリ。信州平沢ヘ壱里八町。本村ニ口留番所アリ。樫山ト二村ニテ、之ヲ衛ル。深沢川ニ対シタル村名ナリ〈後略〉

樫山（カシヤマ）村

一、高弐百四拾九石八升三合、戸七拾、口三百九、男百六拾九、女百四拾、馬弐拾六

浅川ノ北半里許（ばか）リニアリ。長沢ヘ壱里、東ハ小尾ヘ弐里、各々山岳相連（つらな）レリ。幽遠ニシテ、念場ト云曠原（こうげん）モ本村ノ域ニ懸レリ。古ヘ柏埼（ママ）ト名ツケシ牧場ナリト云（日原 1977 p.224）

つまり、浅川村は戸数五七戸、人口一一九人、樫山村は戸数七〇戸、人口三〇九人である。この数字は、『甲斐国志』発刊当時のものであろうが、明治期の合併時にも大きな変化はなかったと推定できる。

(9) 正しくは、中頸城郡である。

(10) 【水没地】小河内ダムの建設にあたり、旧東京市小河内村と山梨県丹波山村及び小菅村の村民が移転を余儀なくされた。移転戸数は資料によりバラつきがあるが、そのひとつ『小河内ダムと湖底の村』（一九七九）によれば小河内村＝五三二戸、丹波山村＝一〇二戸、小菅村＝一五戸である（岩崎 1988 p.17）。

石川達三の小説『日陰の村』は、この時の小河内村の動静が素材となっている。ダム建設の告知以来、水利権の問題などで一向に工事が進まないなかで、移転対象者は生活に困窮し、不安や不満を募らせてゆく。資料【2】はその場面の一部である。

(11) 【八ケ岳開拓部落】は、清里駅の北西、国道一四五号線の西側に位置する地域である。

(12) この四戸の出身地は、1、今諏訪村　2、東京都（前出の茅野達一郎）3、甲府市　4、大日向村である。

このうち大日向村（現・佐久市）は、丹波山村と似て、養蚕と炭焼きが主要な産業であったが、価格の変動が激しく、昭和初期の大不況に直撃された。そのために、一九三八（昭和一三）年、満蒙開拓のために村民の約半数を満州（吉林省）に送出し現地に分村を成立させた（岩崎 1988 p.191）。

(13) 【酒井久重】丹波山村出身で、清里入植時は二七歳。一九四一年に召集され中国大陸で従軍の後一九四六年に復員。長年にわたり入植者たちのまとめ役の約割を果たし、安池とのパイプ役ともなった。

(14) 【神津牧場】日本で最初の洋式牧場として一八八七（明治二〇）年に開設された。群馬県下仁田町の標高一、〇〇〇ｍの高原にある。開設の目的は、有畜農業の導入による農業の改革．乳肉食による日本人の体質改善を図ることであった。なお、一八九一年には、岩手県に小岩井農場が開設された。

(15) 【初期酪農従事者】は以下の通りである（奈良 1992 p.80）。

小峯栄次郎、島崎藤平、青柳源作、新谷徳一（丹波山村出身）

小林貫一（今諏訪村出身）、小林弘之（甲府市出身）、小須田正市（大日向村出身）

(16) ここで取り上げた各入植地に関する記述は、（奈良 1992 pp.92-104）に拠っている。

引用・参考文献

日原興忠による復刻版『甲斐国志』天下堂書店　一九六七年

安池興男『八ケ岳山麓念場ケ原開拓の足跡』発行者酒井久重　一九七八年

奈良靖夫『清里　燃えつきた原野』あすなろ社　一九八一年

奈良靖夫『清里昭和史散歩』朝日新聞東京本社朝日出版サービス　一九九二年

中村勝実『佐久鉄道と小海線』櫟、一九八五年

山梨日々新聞社編『ポール・ラッシュ伝』山梨日々新聞社　一九八六年

岩崎正吾『感激の至情、楽土を拓く　清里開拓物語』山梨ふるさと文庫発行、星雲社発売　一九八八年

エリザベス・A・ヘンフィル著　松平信久・北條鎮雄訳『キープへの道　昭和史を拓いたポール・ラッシュ』立教大学出版会刊　丸善雄松堂発売　二〇一八年

石川達三『蒼氓・日蔭の村』（石川達三作品集第一巻）新潮社　一九七二年

付記

本論執筆にあたり次の方々にお世話になった。記して感謝の意を表したい。

武藤六治、廣嶋都留、清水靖男、安孫子繁、秦英水子、舩木上次、松平謙次